様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　９月　　日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2005-2008
課題番号：17520489
研究課題名（和文）出産の社会史――17-18 世紀の産科医の進出と助産婦の制度化を中心に―

研究課題名（英文）A Social History of Childbirth：The Rise of Surgeon-Obstetricians and the Institutionalization of Midwives in the Seventeenth and Enghteenth Centuries

研究代表者
長谷川　まゆ帆（HASEGAWA　MAYUHO）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：60192697

研究成果の概要：ノルマンディのコタンタン半島に位置するヴァローニュの産科医ギヨーム・モケ・ド・ラ・モットの生涯を追う中で、彼の助産の中心にあった手技の意味を明らかにするとともに、１７世紀末～１８世紀における外科医と医学者の論争の分析を通じて、外科医による助産の倫理と、それに敵対するカトリック神学をベースにした医学者の立場との対立点を明らかにした。これによって、モケ・ド・ラ・モットの助産の意味をより鮮明に捉えなおすことができた。この成果については現在、既発表の論文をベースにより包括的な学術書としてまとめ出版を準備中である。また地方長官による助産婦の養成事業が、助産婦中心の従来型の助産から外科医の影響下に置かれた助産婦による助産への転換をなすものであったことを、ロレーヌの事例から明らかにした。後者については、別途準備中の、アルザス・ロレーヌの多数決原理による産婆の選択に関する研究と合わせ、いずれ学術書としてまとめ、発表する予定である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	900.000	0	900,000
２００６年度	800.000	0	800.000
２００７年度	1.000.000	300.000	1.300.000
２００８年度	800.000	240.000	1.040.000
年度			
総　計	3.500.000	540.000	4.040.000

研究分野：文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：フランス近世・近代史、身体、医療、出産、ジェンダー、宗教、公共性

１．研究開始当初の背景

（１）本研究のテーマは、１９８０年代以降、日本でも広く受容されてきた社会史研究の一領域に属する。社会史研究は欧米の歴史学会では１９７０年代から数々の成果が表れ、政治史や経済史に限定されない人間の生きる日常生活の有様を深く知ることで、それと社会の変動や政治、経済の動きとの関わりを探ろうとしてきた。

（２）出産というテーマは、日常性のなかにある重要なテーマのひとつであるが、長らく歴史学の研究領域では、固有の対象としてはみなされず、もっぱら民俗学や文化人類学の、対象として脇におしやられ、研究の俎上に上ることがなかった。

（３）フランスでも出産の歴史研究は遅れて

やってきたテーマのひとつであり、とりわけ歴史と人類学との交流を経た１９８０年前後になって、ミレイユ・ラジェやジャック・ジェリスらを嚆矢とするまとまった研究成果が現れ、ひとつの研究対象として認知され始めたものである。しかしながら、当時は出産の歴史も人口史研究の影響下にあり、また、さまざまな事実の網羅的な掘り起こしの段階にとどまっていた。

（４）研究代表者である長谷川まゆ帆は、１９８４年に『思想』に発表した論文の中でも示したように、歴史学研究において、男のみならず、日常性の中にある女や子供を組み込んだ全体史の可能性を探っていた。長谷川は、従来の女性史研究の中でありがちな近代のエリート女性たちだけをとりあげて、その女性解放の歩みに視野を限定し、その活動や思想を明らかにすることに力点をおく研究よりも、むしろ名もない大多数の女性たちの生活や生涯を歴史過程の中に位置付け、その相互連関のうちに全体史を思考することをめざしてきた。
　その際、出産は、名もない大多数の女が経験する出来事であり、このテーマは、上記の目論見を達成する上で、格好のテーマであると考えた。長らく黙して語らないとみなされてきた過去の女や子供のありようを、史実に即して具体的に明らかにし、それによって近代社会のしくみや成り立ちをとらえ直していくことができると考えたからである

２．研究の目的

（１）本研究は、１７～１８世紀の出産に関わる変化――出産の場、仕方、人的結合関係における――を明らかにし、それらを王権の凝集力の強化や教会の改革運動、近代医学の形成過程の中に位置付け、その変容の意味を明らかにすることをめざしたものである。

（２）研究代表者はそれまでにも「お産椅子」という近世期のヨーロッパで考案されひろく普及して用いられたお産のための椅子について、その起源や機能、変形の過程、道具の使用を奨励した医学者とその使用をになった助産婦たちの在り方に着目し、残存する椅子や文献記録をもとにその歴史的変遷とその意味を明らかにしていた。その成果についてはすでに２００４年に書物として発表していた。本研究はこの先行研究を受けて、そのさらなる発展の上にあるが、ここではお産椅子に関してではなく、同じ近世期にあってお産椅子を批判した側に立っていた外科医（やがて産科医となっていく勢力）に焦点をあて、彼らの活動や同時代の人々との関わり、思考法や倫理を明らかにすることをめざしたのである。

（３）その際、具体的には、ノルマンディのコタンタン半島に外科医兼産科医として生き、助産に関する膨大な実践と考察の記録を残したギヨーム・モケ・ド・ラ・モットに注目した。そのため彼の著作および当時の論争空間に迫ることが、本研究の重要な目的のひとつとなった。

（４）またこの黎明期の医学、医療における人的、物的、制度的変化は、この時期の助産を考える上できわめて重要な領域である。そのことを具体的に考えるために、地方長官によってになわれた助産婦の養成事業の実態を、地方長官の出自や背景などにも目を向けながら、当時の出産の現実との関わりを探ろうとした。具体的にはアルザスやロレーヌなどの辺境地域でアンタンダン（地方長官）として派遣された国王直属の官僚が、どのような来歴の持ち主であり、また思考方法をもって、どのようないかなる施策を試みたか、さらにはそれが人々にどのように受け止められたかを調査することを課題とした。

（５）関連して、アルザス・ロレ―ヌおよびノルマンディという北部地域のみならず、南仏ではどのように事態が進展したかを探り、日本との比較も視野に入れながら、調査を行うことが、本研究の課題であり、目的でもあった。

３．研究の方法

（１）本研究は、まだまだ未開拓の領域でもあって、当初は、方法的にも手探りの状態にあり、一歩一歩道を探し出していくことが求められていたし、いまもそうである。そのために研究代表者は、可能と思われる文献調査、現地調査を積極的に行い、いくつかのポイントを設けて、課題達成にむけてとりくんだ。

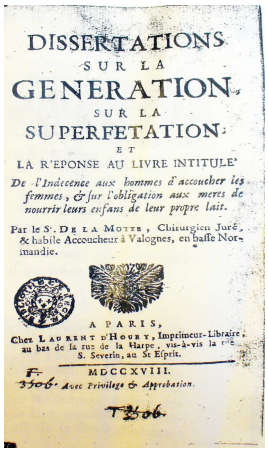
（２）主要な調査の方法としては、現地調査・文献調査であるが、具体的には、パリ、ノルマンディ、アルザス、ロレーヌそして南仏のいくつかの都市を中心に、国立図書館や文書館、市町村の図書館などを探索した。それぞれに手探りで必要な文献を探し、読んで内容を理解するとともに、周辺地域の地理的、経済的、文化的、歴史的背景を広く探り、関連する歴史的なデータを収集した。

４．研究成果

（1）この研究による大きな成果の一つは、先述したモケ・ド・ラ・モットの手技の意味を明らかにする上で重要な手掛かりとなる

関係文書の調査がかなり進んだことであり、とりわけモケ・ド・ラ・モットの論敵であったソルボンヌの医学者フィリップ・エッケへの反論文を入手できたことにある。これはエッケの匿名による批判の出された７年後に、王権による出版許可を得て出版された以下の書物に収録されている。*Dissertations sur la generation, sur la superfetation et la reponse au livre intitule de l'indecence aux homes d'accoucher les femmes, et sur l'obligation auz meres de nourir leurs enfans de leur proper lait*, par le Sr. De la motte, Chirurgien juré & habile accoucheur à Valognes, en basse Normandie.(Paris, 1718, BN de Paris, Tb6867).

この書物は、人間の発生にかかわる知見や精子と卵子の結合によって誕生する新しい生命に関する論争への反論など、モケ・ド・ラ・モットが並行して行っていたあれこれの議論を収集して１冊の書物にまとめたものである。その中にエッケの『男が女を助産することの不適切さについて』（1708 年）への本格的な力のこもった反論が収められている。


DISSERTATIONS
SUR LA
GENERATION,
SUR LA
SUPERFETATION
ET
LA R'EPONSE AU LIVRE INTITULE'
De l'Indécence aux hommes d'accoucher les femmes, & sur l'obligation aux meres de nourrir leurs enfans de leur propre lait.
Par le S'. DE LA MOTTE, Chirurgien Juré, & habile Accoucheur à Valognes, en basse Normandie.
A PARIS,
Chez LAURENT D'HOURY, Imprimeur-Libraire, au bas de la rue de la Harpe, vis-à-vis la r.e S. Severin, au St Esprit.
MDCCXVIII.
Avec Privilege & Approbation.

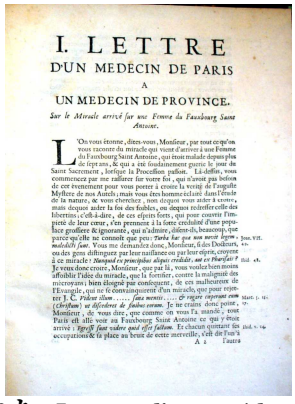
この『不適切さ』の著者への反論 Reponse は、まさに匿名でありながらわかっていたエッケへの論駁をめざしたものであり、モケ・ド・ラ・モットはここでエッケの論を短く要約し引用しつつ、これに対して逐一周到な反論を試みている。彼の立場は一貫して臨床の立場から、母の命を救う上で男である外科医の技術がいかに有用であることを論じるものであり、羞恥心から死を選んだ高貴な女性の例をあげて貞節のために命を捨てることを美徳としたエッケの議論とは、対極をなす。彼は、貞節を重視するあまりみすみす母の命を無駄にするのは愚かなことであるとし、男の助産がいかに命を救うことに求められているかを説き、その点に外科医の職業倫理のすべてをかけていたのである。

このテキストは全体で６０ページほどのものであるが、１７世紀の印刷物であり、綴りも表現も現代のものとは異なり、しばしば活字も薄れ判読の困難な個所もあり、読解にはやや手間がかかる。しかしこのテキストからモケ・ド・ラ・モットが論敵に対し、どのような論理で対抗を試みていたかが明瞭に読み取ることができるし、また医学者対外科医という一般に考えられている単純に対抗軸ではとらえられられない、微妙な立場のちがい、かけひき、政治的、文化的背景についても読み取ることができる。それによって、この黎明期の助産、医療において、何と何がぶつかりあい、軋みあっていたのかが次第に明確になってくるのである。

この文献を含むエッケの諸著作については、モケ・ド・ラ・モットのほかの著作――産科学や外科学の実践に関する出版物――と合わせて調査を進めてきた。その分析内容については、現在執筆中の書物の中でまとめ、詳しく紹介するべく準備中である。

（２）一方、エッケの著作については、これまでにも復刻版が１冊刊行されていた。しかしそれは外科医への批判を試みた書物のみであり、彼の仕事の全体像についてはなお謎に包まれていた。そこで今回は、彼の膨大な著作群を網羅的に調査し、その内容にまで踏み込んで、彼の医学の内容、倫理や思考法を理解することをめざした。

その結果、エッケのよってたつ立場、ジャンセニストとしての思想の立場がいっそう明確になってきた。彼はガレノスなど古代の医学の知見を踏襲しつつも、人間の物理的な自然、有機体的な側面、動物としての代謝や熱や内臓の働きについての当時の医学者の認識枠組みを、自身の学問的前提として周到に身に付けており、こうした知見を最大限に駆使して現象を節明しようとする。しかしながら、彼の議論はキリスト教の信仰とも深く結びついて、それはあくまで神の御技の証明であるという立場に収斂していく。たとえば彼は聖書の教えには決して逆らうことはない。彼はイエス＝キリストを最高位の医学者とみなしていたのであり、イエス＝キリストによって起きたと記されている聖書の奇跡譚も、彼には現実に起こりうる、説明可能な物理学現象として位置付られている。


I. LETTRE
D'UN MEDECIN DE PARIS
A
UN MEDECIN DE PROVINCE.
Sur le Miracle arrivé sur une Femme du Faubourg Saint Antoine.

L'On vous étonne, dites-vous, Monsieur, par tout ce qu'on vous raconte du miracle qui vient d'arriver à une Femme du Faubourg Saint Antoine, qui étoit malade depuis plus de 19 ans, & qui a été soudainement guerie le jour du Saint Sacrement, lorsque la Procession passoit. Là-dessus, vous commencez par me railler sur votre foi, qui n'avoit pas besoin de cet evenement pour vous porter à croire la vertu de l'aiguille Mysteri de nos Autels ; mais vous êtes homme exact dans l'étude de la nature, & vous cherchez, non-seulement à croire, mais encore à voir la foi des fidelles, ou depuis redoublée celle des libertins ; c'est-à-dire, de ces esprits forts, qui pour couvrir l'impieté de leur cœur, s'en prennent à la force crediule d'une populace grossiere & ignorante, qui s'admire, dites-vous, beaucoup, que parce qu'elle ne connoît que peu : *Turba hæc quæ non novit legem, maledicti sunt.* Vous me demandez donc, Monsieur, si des Docteurs, ou des gens distinguez par leur naissance ou par leur esprit, croyent à ce miracle ? *Numquid ex principibus aliquis credidit, aut ex Pharisæis ?* Je vous donc croire, Monsieur, que par là, vous voulez bien moins affoiblir l'idée du miracle, que la fortifier, contre la malignité des mécrovans ; bien éloigné par conséquent, de ces malheureux de l'Evangile, qui ne se convainquirent d'un miracle, que pour rejetter J. C. *Videat illum ..... sana mentis ..... & negare cogerunt eum (Christum) ut defendere de facinore coram.* Je ne croirai donc point, Monsieur, de vous dire, que comme on vous l'a mandé, tout Paris est allé voir au Faubourg Saint Antoine ce que s'étoit arrivé : *Ignoro fuerunne videre quod ejus factum.* Et chacun quittant ses occupations de la place au heur de cette merveille, c'est de l'on'a

A 2 Faurez

彼のジャンセニスト的な立場は、彼の著作の随所に確認できるが、とりわけ 1725 年に発表された *Lettre d'un médecin de Paris à un médecin de Province sur le Miracle arrivé sur une Femme du Faubourg Saint Antoine, I &II*（匿名出版、Paris, 1725 年、BN de Paris,I4d 1407）から、彼の神学的な医学の立場が明確に看取できる。

これはパリの比較的貧しい街区フォーブール・サン・タントワーヌで、７年も前から病に伏せ、衰弱し、弱視で、歩行すら困難であった女（40 歳ぐらい）に起こった突然の治癒をめぐる論考である。エッケは、この女の抱える三重の病苦が一瞬にして完全に癒されたのは、神によって行われた奇跡 miracle のゆえであるという立場をとる。女の病は決して不治の病であったわけではないことから、当時、巷ではそれが奇跡であることが疑われ、女の虚言によって生じた見せかけの奇跡であるとの中傷、疑い、非難の声が跡を絶たなかった。しかし彼はこれに断固として意義を申し立てる。彼によれば、この「瞬時による」「完全な」治癒という二つのメルクマールこそが、奇跡の証であると述べ、人体のメカニズムを説明しつつ、それが神の意志にかなってもたらされた聖なる奇跡であり、自然学の知見とも矛盾することのない究極的な治癒であると主張するのである。

匿名出版であり、この叙述がパリの医者から地方のある匿名の医者 Monsieur ムッシュウに向けて語るというスタイルであることからもわかるように、これがパスカルの『プロヴァンシアル』をまねたプロパガンダであることは想像に難くない。彼はこの機会をとらえて、ジャンセニストの立場から当時の医学的な認識が神の存在と矛盾することなく存立していることを広く読者に向けて啓蒙しようとしていたのである。このエッケの立場と思想についても、現在執筆中の書物の中で詳しく紹介する予定である。

（３）１８世紀にアルザス・ロレーヌに派遣され、助産婦の養成のための無料講習会を開設した地方長官ショーモン・ド・ラ・ガレジエールの出自とその施策、およびその施策への地域社会の反応について、調査し、まとめた。この成果は、すでに論文として発表されている。その論考の中にも記したが、当時、農村では資格をもった助産婦は少なく、地方長官の助産婦養成事業は、こうした農村の出産の「近代化」を目指した啓蒙的な性格をもつものであった。この事業はもともとマダム・デュ・クードレによる助産技術の全国巡回指導のロレーヌでの開催に刺激を得て行われたものである。

しかしロレーヌやアルザスで行われた無料講習会は、助産婦主導の助産とはことなり、むしろ外科医のプレゼンスを重視するものであり、外科医主導の助産をいっそう思考するものであったと考えられる。これはルネッサンス以来の従来の内科医主導型の助産から微妙に異なる方向性をもち、助産婦の新たな再編成への道を意味した。そのことは、成果（１）で述べたような１８世紀初頭の論争を経て、１８世紀の終わりに至るまでに次第に外科医の優位が確定していく過程でもあり、この点は実は、本研究課題を通じてようやく明瞭になってきた部分でもある。これについてはまだ論文として論じたものがなく、いずれアルザス。ロレーヌの助産婦選択をめぐる多数決原理の形成過程を扱う博士論文の中で、改めて論ずる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）
① HASEGAWA MAYUHO," Élection des sages-femmes à la pluralité des voix par des femmes en Alsace et en Lorraine au XVIIIème siècle," *ODYSSEUS*, XII, 2008, Université de Tokyo, pp.1-24.　査読無し
②長谷川まゆ帆、「＜お産椅子＞の歴史と助産の場の変化」『助産師』、Vol. 61、 No I (2007.2) 特集：助産婦の歴史を学ぼう、２６－３３頁。査読無し。

〔学会発表〕（計　１件）
①ジェンダー史学会大会第四回大会シンポジウム「出産のジェンダーポリティクス」（東京女子大学、２００７年 12月２日）にて、報告者３名中の一人として長谷川まゆ帆が報告、発表タイトル「17 世紀にコタンタンで生むこと/生ませること～モケ・ド・ラ・モットの手技をめぐって～」。

〔図書〕（計　２件）
①長谷川まゆ帆「救済の手と簒奪の手が……――モケ・ド・ラ・モットの助産と黎明期の助産――」姫岡とし子ほか６名による共著『近代ヨーロッパの探求――ジェンダー』ミネルヴァ書房、２００８年、１－６０頁。
②長谷川まゆ帆「地方長官と助産婦講習会――併合期ロレーヌの遺制と国家プロジェクト――」近堂和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』山川出版社、２００８年、１９０－２２７頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
長谷川　まゆ帆（HASEGAWA　MAYUHO）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号　６０１９２６９７

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし